

本論の課題は、まず、2010年上海万国博覧会を対象として、現在の上海市の市民参加状況・段階を確認し、地域発展に対する影響を把握することである。同時に、博覧会国際事務局（Bureau International des Expositions 以下、BIE と略す）が「万博」というイベントを開催する意義をもとに、上海万博のテーマを再考する。そして、この万博が、上海市と上海市民に何をもたらしたのか、上海市または万博会場がどのように活性化されたのかについて研究する。これらをふまえて、将来の上海市の市民参加について考察し、今後の上海市の市民参加の参考モデルを構築してみたい。

この目的を果たすため、第2章では、万博の歴史と発展・意義を確認する。万博を主催する背景と時代の流れによる万博の変化を検討しながら、各主催国が万博に大きな機能を賦与し、社会および人類に重要な影響をもたらしてきたことを明確にする。これは、各国が万博を申請・開催する主要成果（Main Effect）である。上海万博も、中国社会の発展を狙い、BIEの理念に基づき開催されたことを振り返る。

第3章は、先行研究を整理し、本論の課題を解決するための論点を検討する。とりわけ、筆者の分析を支えるパースペクティブを抽出する。上述の通り、本論の課題は、中国社会を背景とした万博の意義と跡地利用の可能性を、市民参加理論と重ねて分析することである。そのため、中国人研究者の理論も用いるが、他国（主として日本）の理論も参考にして、理論的な再検討も試みる。

本論においては、上海万博と比較する事例は二つあり、第4章ではそのうちの1つ、日本の愛知が主催した愛・地球博（以下、愛知万博と略す）の概要及び市民参加の詳細を説明する。特に、万博会場の計画の中で、いかに市民・NPO/NGOが環境保護を主張しながら、行政と平等に交渉することができたのかを把握し、愛知万博の市民参加のアプローチやプロセスを分析する。これをうけ、上海万博の参考モデルにもなった「市民参加型万博」の方向性を確認し、現在の中国社会の市民参加状況と関連させつつ、上海万博を振り返る分析の枠組みを提示したい。

上海万博についての分析は第5章から始める。第5章で、上海万博の全貌を紹介しつつ、万博開催の経過とその後の現状を分析する。これにより、万博の市民参加の実態が明らかにされることになる。ここで、上海万博の実施と背景を論じる。また、市民目線での万博に対する記憶を再検討する。つまり、各人の主観的な思い出から出発して、市民各自の参加意識を明らかにし、市民の参加意図の確認も行う。また、第5章は、市民参加の結果を描くこととする。とくに、上海万博では、市民の行政（間接的には万博）への協力は、住民の立ち退きが具体例となっていた。市民参加が立ち退きという結果と同一視されることはたいへん残念ではあるが、これは多くの市民と関係がある事情のため、上海における市民参加の形という意味で、非常に重要である。上海万博の全体図と理念を描写するパートだが、開催組織について詳細に記述する。上海万博は、行政がリーダーとなったわけであるが、この万博の組織について理解し、この組織の性質、役割および担当分野を検討する。また、この組織が、実際の万博運営において市民参加とどのように関わったのか、そしてその可能性についても分析したい。次は万博跡地の計画を記述する。そして、万博閉会後の会場跡地開発とその問題点を析出する。跡地問題は、万博開催の延長線上に置かれるべき課題である。それゆえ、市民の生活と利益に非常に強く結びついている。また、インタビューによる行政関係者の発言も引用しつつ、現在の上海における跡地開発の進行状況とその利点、欠点を報告する。また、市民が跡地計画にどのように参加したか、参加で

きていないかに関する分析も、あわせて論じる。最後に、BIE 目線の上海万博の成否について、BIE 理念と上海万博の実績を結合し主要成果及び市民参加との関連性を分析する。

第 6 章は中国における人本主義の理解に関わる概要を明らかにし、市民参加の展開に対する影響も分析する。将来に向け、上海万博における市民参加がいかに地域開発および地域の発展に役立ち、こうした参加実態がどのように今後の社会形成のモデルとなるかについて考察し、その結果を論じる。

第 7 章では、市民参加そのものについて、現在の上海市の参加現状から判断し、将来の参加の方向性を展望するため、上海万博と対比させるもう 1 つの事例を取り上げる。それは、上海市内の「田子坊」地区である。対比させる事例の 1 つである愛知万博に加え、もう一つの比較事例である田子坊地区は、上海市内にある有名な商業区域である。しかし、この地区の開発においては、上海万博と共通する政治背景の下で、実際に市民参加が行われ、その市民側の意見にもとづいて地区の改修が行われていた。田子坊における市民参加の歴史は、中国においては比較的長いといわれるが、興味深いことに、時代の流れとともに住民の自発的な参加が進んできている。そして、現在、同地域の繁栄の大きな原因となっているのが市民参加だと言われている。さまざまな理由で、完全な市民主導の仕組みや、地域の住民達による自主管理の体制が崩壊し、行政の干渉を受けたが、それでも、同事例は中国におけるまちづくりの中ではたいへん珍しいものとされている。

さらに、第 7 章では、前章の事例紹介をふまえた田子坊の発展の概要と、市民参加の具体的な形を論じ、要約を試みる。そして、市民参加の枠組みを、万博との関連性を詳述しつつ、上海における市民参加の形態として論点を抽出する。ここでは、対象事例をまちづくりまで広げているため、上海市内の一地区としての「まち」を「つくる」ために、どのような市民参加が行われてきたか、その現状と段階を検討する。これには、日本語文献の市民参加理論を引用して比較し、日本の現状としての市民参加モデル検討を通じて、現在の上海市の状況をより具体的に理解することを目指す。ここで、筆者自身の考えを踏まえ、上海万博における市民参加の展開と帰結について検討する。とくに、市民と BIE、市民と行政、行政と BIE の間の関係を明らかにし、上海における市民参加という社会活動を明確に描写する。

最後に、結語では、本論の要約とまとめを試みる。まず、BIE の万博の理念と狙いにもとづき、上海万博そのものを振り返る。また、愛知万博と田子坊とのそれぞれの比較から、上海万博が目指した理念、組織、計画が、上海市の市民参加の促進にどのように位置づけられ、どのような歴史的な論点を加えたのかについて考察をまとめる。上海万博はすでに終わったが、この万博のインパクトは未だに影響を有し、上海市という社会構築・都市形成・市民参加状況に結びついている。そして、この経緯によって、現在、上海市民は自分で自分のまちの運命をコントロールしようとする意識を徐々に持つようになり、市民参加の度合い（段階）が上がり始めている状況を論点化する。ただし、この傾向が見られる一方で、国家・地域政府の立場にも変化が見られるが、反対に、各種政府的機関と市民との関係構築のあり方の硬直化も明らかになってきた。したがって、将来の上海地域の発展のためには、上海市民が自分の「市民としての権利」を主張できるよう、本論の最後に市民参加の意義をやや大胆に主張し、上海市域のこれからの役立つ論点を指摘する。